
金木犀の誓い～銀時、いよいよ結婚式～

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金木犀の誓い〜銀時、いよいよ結婚式〜

【Nコード】

N2132M

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

純情一目惚編から愛を育んできた銀時がいよいよ、結婚式！とはいえ、無事に終わるところか、無事に始められるかどうかも危ういことに？

女友達の友情！十四郎と銀時の刹那の友情（？）！そして、総悟の甘い口説き！最後は銀ちゃん、甘渋味で仕上げるストーリーになりました。いろいろ書きたいことを盛り込んでいたら、なんだかちよいち長めに…万事屋+真選組風味の結婚式前のドラマを楽しんでいただけたら…そう思っています★

残暑もようやくおさまり、朝夕に秋の気配が漂いはじめた頃、銀時と彼女は神田明神で用事を済ませ、参道から御茶ノ水方面に向かっていた。孔子廟脇の木陰にさしかかった時、ふと風にのってよくかいだ覚えのある花の香りが、銀時の鼻をくすぐった。

…あ、またこの香り。この花の季節になったんだア…

風に向かって、香りを確かめるように顔をあげていると、彼女が銀時に向かって話しかけてきた。

「銀時さまは、この香り、何の花の香りかご存じですか？」

「…え？知らねエよ。ってか、よくかぐなアとは思っていたけどさア、全然ッ意識したことなかったわ…」

「よーっくかいでみてくださいませ？たぶんきつと覚えがあるはずです」

「えええ？まじでエ？」

ひくひくと風の中で鼻を動かしてみる。

…ん？んんん？あ、なんか、わかるような…？

「つよっしゃア、はいッわかりましたア！これはアトイレの芳香剤の香りィ！」

「…！！！！……ぷふっ」

「どうよ？と彼女を見下ろすと、吹き出しそうになっている…というかもう吹き出していた。

「あれ、違うのオ？でも、これってエあれでしょ？トイレのサワデーの香りッしょ？」

ほら、爽やかサワデーみたいなア？」

「半分正解で、半分はズレですッ！銀時さま、罰として鯛焼をごちそうしてくださいませ！」

「え？半分だけエ？」

って、それより後半の意味ちよつとわかんないよ？いつ決めましたっけ？そんな話？」

「たった今ですよ？さ、鯛焼、鯛焼！」

彼女は銀時の背中にまわり、腰をぐいぐい押して銀時をせかすようにした。：おいおい、なんだかちよつと強引じゃないのオ？と文句を言いながら、彼女に押されるがまま歩く。なんだかちよつとはぐらかされたような気もしたけれど、彼女が鯛焼をねだる様子が嬉しくて、内心百個でも何個でも買ってやらアと思っていた銀時だった。

：結局、花の名前はわからずじまいだったんだよなア：

鯛焼をふたりで頬張りながら、正解を教える？と言っても「内緒です」とにこりと笑うだけで教えてくれなかった。

：ああなると、けっこうあいつ手強いんだよねエ。たぶん絶対言わねエ気だよ、きっと。

やっぱ、財布を忘れてエ、結局鯛焼はあいつに買ってもらったのが、だめだったかア？

え？なにに？結局、俺が悪いのかア？あれ？

あいかわらず立て付けの悪い万事屋の窓を、よいセツと声をかけながら銀時は開けた。空はきれいに晴れて、雲ひとつない青空が広がっていた。青空に思わず目を細めながら、朝の空気を胸いっぱい吸い込む。

：なんだって、今日に限ってあの花のことを思い出したんだア？
空に向かって、あっぱれ、日本晴れ：ってか、と独りごちる。そのまま窓枠にもたれかかり、見るともなく窓の外を見やる。

：ゆうべからのどに刺さったちっせエ小骨みてエに、あの香りの花のことが、なんツかひっかかってんだよなア：

彼女は昨晚から、神楽といっしょにお妙と新八の家へ泊まりこみ体制。万事屋には銀時しかない。定春も神楽が連れていった。泊まりの準備をしている時、神楽までもがやけに緊張した面持ちになっていた。てめエの結婚式でもねエのに、何をそんなに固まっていやがんだア？とからかったら、いっちょまえに口をとんがらせて「女には女の心の準備があるんだよ！」とぬかしてたな：と、神楽のふくれっつらを思い出しながら銀時は苦笑した。

準備ができて、神楽、定春といっしょに志村家に向かう彼女に向かって、銀時は「なんも心配するこたアねエから、今晚はゆっくり寝な？」と声をかけた。

「：はい。銀時さまこそ、おひとりで大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫：たぶん大丈夫。さみしいけど。すっごいさみしいけどオ、たぶん大丈夫。」

朝はババアに身支度手伝ってもらうし、きつと大丈夫」

「銀ちゃんが遅れたら、マヨ王子でも代理にたてて式をやっとくから心配ないアル！ね、定春？」

「ッておいッ！なんでそこマヨ王子イ？ってかなんで代理イ？

いや、俺、遅刻なんかしないよ？こんな大事な日に遅刻なんかありえねエし！

おうッ、心配すんなッて！明日、式場で待ってるから！そっちこそ遅れんなよッ！」

心配そうに何度も何度も振り返りながら行く彼女に向かって、大

きく頷きながら手を振ったのがゆうべのことだ。

いよいよ今日だな：

軽くため息をつきながら、大きなびをひとつする。

首を左右に回すと、コリコリと音をたてて鳴った。相当、体ははりつめているらしい。

「…あゝあ、柄にもねエ…」

頭をかきながら、台所にいき冷蔵庫の中からいちご牛乳のパックを取り出す。

「…ってエ」

パックにストローを差込みながら、顔をしかめた。

「…ったく、柄にもねエ…」

胃の腑あたりを押さえながら、じゆるじゆるといちご牛乳をすする。すすってはいても、気持ちの上の空で味もよくわからない。こんなに緊張するとは、自分でも思いもよらなかった。しかも胃まで痛くなるとは…思いがけなさ過ぎて「ったく…始末におえねエ」と、舌打ちする他ない銀時だ。

いまごろ、準備を始めた頃合かア…？

手にいちご牛乳のパックを持ったまま、応接セットのソファアーのど真ん中にドサツと座る。背もたれにだらしなくよりかかって、天井に向かってまたひとつ大きくため息をついた。窓からふいと風が吹きこむと同時に、かすかな花の香りが部屋のなかを駆け抜けた。

…なんてエったっけか？この花の名前：

いちご牛乳のパックにさしたストローをくわえたままソファアーに座っていると、階下から勢いよく誰かが上がってくる足音が聞こえ

た。

「銀時ィ、起きやがれエ：って、おや！起きていたのかい？」

お登勢が、銀時の姿を見て心底驚いたように目を見張る。

「あ？起きていりゃ起きていたで、失礼なババアだな、このやろウ。もうずいぶん前から、起きていたツつの！」

じゆるじゆるといちご牛乳をすする銀時に向かって、ふん：と笑いながらお登勢は言う。

「おおかた、今日のことを考えて眠れなかった、ってエのが本音なんじゃないのかィ？」

「：ッるせえな、ババア。」

：その通りだよ、悪ィかよ：もう寝不足で頭クラクラなんですけどォ」

「しつかりおしよ、だらしのない。お忘れかもしれないが、今日はあんたが人生の中で唯一周りから祝福してもらえる大事な日なんだよ？下ッ腹に気合いれて、やっておくれな！」

「ッて、唯一ってなにそれ？俺の人生、そんな薄っぺらいの？今日しかないわけ？」

「あと、てめエが人様から注目してもらえんのは葬式の時くらいだよッ！だけどそんな時ア、てめエは死んぢまつてるからわかんねエだろうが。だから結婚式くらいは、本腰いれろってことさね」

そんなことはお登勢に言われるまでもなく、承知している。

「：ああ。わかつてるって」

あいかわらず、じゆるじゆるといちご牛乳をすする銀時。

「今日はどんなかんじで動くか、ちゃんとわかってんだろウねエ？」

「ッたりめエだ、俺の結婚式だよ？」

今日は、こっちを九時くらいに出て十時には神田明神に着くようにする。

で、着いたら着替えてエ。あいつは、新八んここで準備してくるから十一時に神田明神に着く、と。あいつが来るのを、俺が出迎えて、式。

その後は、新八んちで列席者だけで軽く打ち上げて、はいおしまいッ。こんなかんじだろ？」

「ま、そうなんだけどね。」

あと打ち上げじゃなくて披露宴だから！勘違いおしでないよッ。調子こいてあんたが一番呑んだらしまいだからねッ！わかってんのかいッ？」

「うるせエなア、わかってますって。誰がてめエの結婚式でつぶれるまで呑むかッつの！」

「そうかい？あ、万が一の時のために、あんたがお銚子一本以上呑もうとしたら指を切り落としてでも、お妙ちゃんが止めるってさ。よかったねエ」

「…よくねエよ！ってか、万が一ってなにッ？なんでそうなるわけエ？」

銀時と軽口を叩き合いながら、お登勢は台所で手早く握り飯をつくり、味噌汁を作っていた。豆腐と葱の味噌汁を椀に盛り、塩をまぶしただけの握り飯を皿にのせ銀時の前に出す。

「まあ、あのこの味とは違うだろうが、喰いな。」

今日は長丁場になるんだから、朝くらいしつかり喰ったときな！」

あいかわらずじゅるじゅるといちご牛乳をすすりながら、銀時が情けなさそうな声を出す。

「…俺、なんかもう昨日から胃が痛くってよ、まじ食欲ねエんだよ、ババア」

ソファアーからお登勢をうらめしそうに見上げ、胃の腑をおさえてみせる

そんな銀時の様子を見て、お登勢は肩をゆすって笑い出す。

「はっはっはっはっはア。あんたも所詮、人の子だねエ。緊張のあまり、胃痛かい？」

ああ、おかしイ。まあ、食欲なくてもいいからまず味噌汁だけでも飲みな？」

胃袋をあたたためて、元気にしてやんなきゃ、今日の大仕事をやり

遂げられないよ、まったく」

「…へえーい」

うんざり顔のまま、それでも銀時はお登勢の言うことに従い、腕に手をのぼし味噌汁をすすり始めた。銀時がしぶしぶ朝飯に手をつけたのを見て、お登勢は窓の外を見るともなく呟いた。

「晴れてよかったねえ…」

「まあな、花嫁衣裳が濡れたりしねえでよかったよ」

「確かにね、花婿なんざいてもいなくてもいいようなものだからね。結婚式は花嫁のためにあるんだからね」

「…ああ」

台所に戻ろうとしたお登勢に向かって、またもやふわっと風が吹き抜けた。

「ああ、いい風だ。金木犀の香りがするよ…」

お登勢の言葉に、銀時の頭の奥の芯で、なにか閃くものがあった。胃の痛みも瞬間忘れて、ソファアの上で思わず居ずまいを直す。

…落ち着け、落ち着けエ。これだよ、これエ！

「…ババア、今なんだった？」

「あ？いい風だ、って」

「ち、がアアアーう！その後！」

「え？金木犀の香りだねって…」

「それだア！」

彼女が銀時にその名を尋ねた花の名前は金木犀だ。

花の名を思い出した途端、銀時は金木犀にまつわる彼女の思い出話も思い出した。いつもの暮らしの中で、何気なく彼女が話していたことだったが、今、やっと銀時は気づいた。

朝顔市に行こうか、それともほおずき市に行こうか、と話してい

た盛夏の頃、神楽がこう言ったのだ。

「夏は朝顔とか、ほおずきの市があるけど、秋はなんもないね！なぜアルか！」

「いや、神楽ちゃん、秋は紅葉狩ってもんがあるけど」

「でも紅葉を狩りにいったって、屋台はないアル！」

「あ、そこなんだ…」

「バカですか、あんた？秋は秋の楽しみがあるでしょうが！

ああん？秋のフルーツを狩りに行くというビッグなイベントがあるでしょうがッ！」

「いや、それは秋じゃなくても苺とか、桃とかもやってるからね…」
そんな会話をしていると、彼女が麦茶を出しながらこう言ったのだ。

「秋といえば、やっぱり金木犀じゃないかと！」

「なにそれ？はじめて聞くアル！それはどんな実アルか！」

「金！木犀ねエ…ちよつと卑猥な響きじゃなァい？」

「ちよつ、あんたら、金木犀も知らないんですかッ！きれいな花とかぐわしい香りの木ですよッ」

聞けば、彼女が生まれたのが初秋。誕生を記念して父親が庭にその金木犀を植えてくれたのだという。毎年、金木犀の樹木がすこしづつ自分といっしょに大きくなるのが楽しみだったと、彼女は懐かしそうに話した。

「おそらく香りはよくご存じだと思います。」

花は小さいけれど簪のようにかたまって咲くので地味ですが、なかなか味わい深い花でして！

そのたたずまいが粹っていうか、私、好きなんです」

「じゃあ、誕生日がきたらみんなでその花、嗅ぎに行くアル！」

「いや、嗅ぐんじゃなくて見に行こうよ、そこは…」

「なんかいいんじゃねエの、その話。金！木犀、いいんじゃねエの？」

「だーかーらッ、その金！のところで区切るなッつの！」

おそらく屋敷を追い出された時に、父との想い出につながる金木犀への思いも置いてきたのだろう。珍しく金木犀について熱弁をふるった彼女に、銀時はこう言ったのだ。

「今年の秋は金！木犀狩りに行ってみっか？」

銀時の言葉に、はい！と嬉しそうに頷いた彼女の顔を、今、まざまざと銀時は思い出していた。

…やっベエ、誕生日はみんなで祝ったけれど、式の準備やらなんやらで金木犀の方はべろっと忘れていやがったア：

味噌汁の椀を手にしたまま、固まってしまっている銀時。お登勢がたまりかねて声をかける。

「ちよつと、銀時！どうしたい？胃の腑がやむのかい？薬でも飲むかい？」

「…いいや、薬はいらねエ。

俺ア、ちよつくら出掛けてくつから、後の戸締りとかよろしく頼むわ。あ、あと身支度は神田明神でちゃちゃつとしちゃうからよ、荷物持つといってくれっか？」

「でかけるって、どこに？ってか、今日てめえの結婚式だろ？」

「結婚式だから、ちゃんと約束守んなきゃいけねエんだよ。

朝飯、うまかったぜ、ババア！じゃ式場でな！」

味噌汁をガツと勢いよく呑みほし、握り飯をひつつかんでガツガツと頬張ったかと思うと銀時は立ち上がり、走り去っていった。

「じゃ、式場でな、って、こるあ！てめえ、いいかげんにもほどがあるんだよッ！」

あきれかえったお登勢は、ただただ途方に暮れるばかり…この時、時刻は7時。

銀時が柄にもなく胃痛と緊張で呻き、そして何事かを思い出し万事屋を飛び出していった頃、松平片栗虎も、真選組屯所にて呻き声をあげていた。

「…ウエエエイ、おうい、誰かア！冷たいキーンと冷えた水をくんなエかア？」

おじさん、ゆんべちよつと呑みすぎたアアアア…」

応接間で、これまた銀時同様ソファーにどっかり座り込んだ状態でだみ声をはりあげる片栗虎。ほどなく軽い足音が聞こえ、こちらに近づいてきた。背後に人の気配を感じ

「ウありがとよう…ッばはアアアアッ！」

お礼を言いかけた口で、片栗虎は思わず叫び声をあげた。びしょぬれになったまま、振り返ると深紅地に見開いた目が描かれたアイマスクを額に乗せたまま、起きぬけの不機嫌な表情そのものの総悟が立っていた。左手には空のグラス。グラスのなかみはすべて片栗虎に注がれている。

「…お待たせいたしやしたイ、ご所望の水でさア」

「そ、総悟ッ？てんめエ、なにしゃガンでイッ？」

「水をくれというから、さしあげたまででさア。足りなかったですかイ？」

「誰がかけると言ったアアアアッ！おじさん、びしょぬれじゃねエかッ！」

「なーに、ちよつとばかりまだお目覚めのようなではなかったようなんで、しゃきつとするようにしたまででさア。こちらら夜勤あがり床についたばかりのところを起こされて、ちよいと腹にすえかねてるってエもんですが、お気になさらずけっこうでさア」

「って、おめエ、おもいつきり仕返ししてんじゃねエか！冷てエんだようウ！」

「…じゃ、こんどはバズーカあたりの火にあたってみますかイ？」

…カシヨッ。総悟の右手の方から何かの安全弁をはずす金属音が

かすかにした。

「よしよしよしよしイイイ、おじさんが悪かったアア！
寝入りっぱなところ、おじさんが騒いで悪かったアアアア！

だからお願いッ！せめてタオルだけでもちようだいイイイイッ！」
片栗虎の必死の叫び声に、ようやく勲や十四郎が駆けつけてくる。
「とつつあん！大丈夫か！」

「大丈夫もなにも、おじさん心底怖かったア！殺されるかと思った
よウウウ！」

さしだされたタオルで顔をぬぐいながら、勲らに話しかける片栗
虎。

そんな片栗虎の傍で、下唇を突き出し憮然とした表情の総悟を十
四郎がどやしつける。

「…ッ！総悟ッ、てめエエエッ！朝っぱらから物騒なもん、小脇
に抱えていやがんじゃないエエ！」

「なに、ちよいとしたライターがわりってもんでさア」

「いや、それで火イつけたら焼死しちまうから！犯罪だから！」

「大丈夫でイ、きちんとかげんすりゃア…」

バズーカを挟んで睨み合うふたりの間に、勲が割って入ってくる。
「ああ、もういいから！ふたりともいいから！後は俺がやとくか
ら！」

総悟！おまえは式前に少しでもいいから仮眠をとれッ！それから
トシ！おまえはとつつあんの分の式服も早めに用意しとけ！」

へえーい、あいよ、とゆるく返事をし、それぞれの部屋に向かう
十四郎と総悟。

「なんだかんだで、晴れやしたねイ」

「ああ、そうだな」

「じゃ、またあとで…ふっ」

「…おう」

バズーカをガシャガシャ揺らしながら総悟が部屋に戻る。立ち去

り際の「…ふっ」が気になるが、この際、もういい。

十四郎は部屋にそのまま戻る気にもなれず、屯所の中庭に足を向けた。

屯所の中庭に面した縁側で、十四郎は煙草に火をつける。ふーつと煙を吐きながら、中庭一面の椿の木々を見た。この椿は寒椿だから、まだ花はひとつとして咲いてはおらず、深緑色の艶のある葉が時折小さく揺れているだけだ。光沢のある葉の色が深い影を落とし、中庭の風景にめりはりをつけていた。

冬に出逢った今にも折れそうだった白椿は、いまやしつかりと根を張ることができた。これからは、自分の力で新しい花を咲かせていくことだろう。

そう思っ、彼女の幸せを折りにつけ祈ってきた。ふとした瞬間に、先に出逢っていたのは自分だったのに、といまだに思うことはある。そして、なぜもっと早くあの時感じた思いを、彼女に告げなかったのか、と後悔した夜は幾晩もあった。

「…けど、好きだと言っても、やっぱり選ぶ男はあいつなんだろうな」肺の奥底にまで煙を吸い込み、もういちどゆっくり煙を吐き出す。煙が目の前でゆらめくのをぼんやり眺めていると、寒椿の生垣の隅からチリチリと小さな鈴の音がした。なーん、と小さくなき声をあげながら、真っ白い猫が十四郎の姿を見て足許に駆け寄ってくる。

「お、椿！よかったな、その首輪。お似合いじゃねエか？」

十四郎にあごの下をなでられながら、猫は目をきゅつと細め嬉しそうにごろごろと喉をならす。

「その首輪をつくってくれた娘は、今日、花嫁さんになっちまうんだとよ。」

行きたくねエが、式に出席して、本人に首輪のお礼も言ってこねエとな…」

猫をひょいと抱き上げ、膝の上に乗せる。ふと見上げれば、頭上には青空いっぱい秋の空。

「…あんなふざけた野郎の結婚式なのによ、こんなに晴れ上がるなんてなア…チェ…」

苦笑いまじりに、もういちどふうーと煙を吐き出す。秋の空に向かつて、十四郎の煙草の煙が細くたなびく。

「ツたく、お天道様もずいぶん気まぐれなこった…やんなるねエ」

その時だ。猫が現れた生垣の隅からザスザスツと椿の枝や葉を折って何かが近づいてくる音が聞こえた。

「…つとオ、穏やかじゃねエなア…」

猫を縁側にそっと置き、くわえ煙草のまま刀の柄に手をかけ、十四郎はすつくと立ち上がった。

「…出てきやがれツ」

…！

「俺だツ！万事屋だツ！」

十四郎は目を見開いたまま、銀時を凝視する。生垣の中をぬってきたからか、髪の毛も着物もがしゃがしゃだ。

「…てめエ、ここでなにしていやがる…！」

「おめエに、手伝ってもらいてエことがあつてよ。…だから来た」

「…ンだとウ？手伝ってもらいてエ？つてか、そもそもてめエは今日結婚式じゃねエのかよ？」

こんなところで、うろろうしてていいのかよツ？」

「俺だって、気持ちの整理のひとつやふたつくらいして結婚してエけどさア、ひとつだけ約束を果たしていねエことに気づいちゃったのよ。で、手伝いをお願いしに来たってわけエ」

「…っはア？ぜんっぜんおっしゃってる意味が、わっかんないんですけれどもオツ？」

「まあ、聞け。いいから聞け」

ずたぼろ姿のまま、銀時が十四郎に近付き何事かを話した。最初は眉をひそめ、胡散臭げに聞いていた十四郎の顔色が途中で変わり、

真剣味を帯びる。

「他のところにあるヤツじゃアだめなのか？」

「あいつの金木屋は、親父が自分のために植えてくれたやつしかねえんだよ。」

だからそれをあいつの手に戻してやりてえ。それだけだ」

「…結婚式が終わってから、とつつあんに頼んで手配するって手もあるンじゃねエのか？」

「…忘れてた俺が悪イんだが、金木屋があいつのおやじさんやおふくろさんがわりになんじゃねエかと思ってよ。式にも参列させてやりてエのよ、金木屋を」

ほとんど灰になりかけた煙草を、靴底でもみ消し十四郎はふん、と鼻で笑う。

「…わかった。ただしおめエのために手伝うんじゃねエ、あの娘のためだ、いいな？」

ニヤリ、と銀時が笑って返す。

「マヨ王子なら承知してくれると思ってたマヨ？」

「…いいから、それ、やめろ」

屯所の江戸地図資料室から、彼女の屋敷見取り図をとってくると言って十四郎が立ち去った。銀時はそのまま縁側に座り、猫にちょっかいを出しながら今日の段取りを考えている。

…まず、屋敷内に入り込み、見取り図に従って金木屋を探す。…金木屋を掘り出す道具がいるな、シャベルか？スコップか？

「なかなかおもしろそうな話でやんすねイ」

突然、頭上から声が降ってくる。見上げるとそこには総悟がアイマスクをまだつけたまま、立っていた。

「あ？何の話イ？」

猫をふわりと抱きかかえ、あやす仕草をしながら銀時はとぼける。

「その話、ひとつ囁かせてもらいやせんかい？」

「その話って、どの話イ？」

「知っていやすか？万事屋の旦那。金木犀って、けっこうな巨木になるんですぜイ？掘ったはいいが、運べねエなんてエことになったら目もあてられねエ。人手と知恵はひとりでも多いほうがいいんじゃないですかイ？」

…っはア、ったくよオ。

「なんだって、こう面倒臭エことにわざわざ頭を突っ込んでくるわけエ？しょうがないコだよッ！って、ほんとは別になんか目的でもあるのかよオ？」

「なアに、旦那は花嫁のために、そして土方さんも花嫁のために。そしてあっしは単におもしろいことが好きってだけでさア」

「…まアいい。そこまで言うなら俺たちにつきあえ。で、運搬方法だがどうする？なにか案はあるのかよウ？」

「ありまさア。旦那とこのでけエ犬、あれに運ばせんでさア」

「定春にイ？…でも、そうだな…あいつなら足も速エし、俺たちの言うことも聞くんさ…」

あ、でもヤベッ！ゆうべから新八んとこに神楽といっしょに行っちゃまってんだったわッ！」

「じゃあ、こうしやしよう。土方さんが戻ってきたら、あっしは目指す屋敷の住所を確認して志村道場に向かいやす。そして、白犬を連れ出してそのまま屋敷に向かい旦那方と合流すりゃア、いいんじゃないですかイ？」

「おっしやア！その話、いただきだだア！」

「何がいただきだ？って、なんで沖田がここにいやがんだア？」

地図の写しを手にした十四郎が、総悟を見下ろしている。あいた手で銀時の胸倉をつかんで問い質そうとした。

「じゃ、旦那、そういう段取りでよろしくウ！」

そのすきに生垣をさっと刀でかきわけ、総悟はすっと姿を消してしまふ。

「そういう段取りってどういう段取り？ おめエはいったいなにしてんだッ？」

「まあまあまあ、落ち着いて、落ち着いて…」

キレる寸前の十四郎をなだめすかしながら、彼女の屋敷に向かう銀時。

この時、時刻は七時半。

さて…と。

真選組の覆面パトカーに堂々乗り込み、軽々とハンドルをさばきながら志村道場に向かう総悟。

左手でハンドルを操りながら、スピード違反ぎりぎりの速度で公道を突っ走る。

あのバカでけエ犬連れ出す策に乗ってもらったはいいが、連れ出すにしてもあのチャイナ娘が障壁になるだらウから…

ぐいッと手荒な仕草でハンドルを切る。

まず、チャイナ娘をなんとか始末しねエとな…

志村道場からやや離れたところに車を止め、道場門前まで総悟は歩いて行った。

…正面から入るのもなんなんだしィ、この際秘密の仕事の助っ人も秘密にやるとしますかィッと。

ニツと笑いそう呟いたかと思うと、ふところから鍵爪のついた鎖紐を取り出す。ひゅんひゅんと回し、道場塀の上に生い茂っている楠の大枝にひっかけると、総悟は鎖紐伝いに塀をつつと登り、枝にたどりつく。楠の葉陰に隠れながら道場敷地内の様子を伺う。道場側の方はしーんと静まり返っている。ただし、母屋の方からは、なにやらざわざわした雰囲気が伝わってくる。甲高い女同士が交わす会話のようなやりとりもかすかに聞こえてきた。

今日の式に出席する女衆が、ここに集まって花嫁の身支度の手伝いをするんだっけか：

楠の枝から音もなく、敷地に着地すると総悟は一気に母屋の方まで駆け抜けた。

近藤さんから聞かされてきた「お妙さんと俺話」がまさか役に立つなんて、意外でしたぜイ：

苦笑しつつ総悟は母屋の中でも奥向きの部屋を目指し、足音をしのばせながら廊下をスススッと歩いていった。お妙に愛の気持を伝えんがために、屋敷内に何度となく足を運んだ勲にとってある意味、志村道場は自分の家にも等しいほどその間取りを熟知していた。その話を耳にタコができる程、聞かされていた総悟にとっても、ここ志村道場の間取りは手に取るようにわかる。しかし勝手知ったる…とは言うものの、相手はあの神楽。

…油断も隙も禁物だってエことですかイ：

長い縁側を端まで歩き抜け、角を曲がろうとした時、人の気配を感じて総悟はぴたりと足を止めた。障子ひとつ向こう側に確かに、

人の気配があった。

「…なんだかア、落ち着かないアル…。なあ、定春？」

「…くおん」

しめたッ！でか犬だ…ッ！

総悟は人知れず、思わず拳を握る。おそらくでか犬に話しかけているのは、例のチャイナ娘。闘う時間がもったいないので、問答無用にでか犬をかつさうか…いや、それよりもチャイナ娘に事情を説明した方がいいのか？説明が通じるかどうかも危うい…部屋の様子を伺いつつ、総悟が逡巡していると、中から声がかかった。

「そこに誰かがいるのはわかってるアルよ。何もしないから、入ってこいヨ」

…ちッ、きづいていやがった…ッ。

総悟は小さく舌打ちをしながら、覚悟を決めてさらりと障子を開けて中に足を踏み入れた。

そこには連れ出さなくてはならない白いでか犬と…

「…チャイナ娘…？」

定春の横に寄り添うように座っていたのは、頭の左右に饅頭状に髪を巻き込み、明るい紅の中国服を着込んでいるいつものチャイナ娘ではなかった。

鉄紺色の地に薄紅色や、薄桃色の華やかな牡丹の花が咲き乱れる柄の振袖。そして朱色に金糸の刺繍を施した帯を胸高に結んだ娘がこちらを睨んでいた。漆黒の闇のような色の振袖は、夜兎族特有の

白い肌を、さらに陶器のようなくもりひとつない白さに見せている。

「…おまえ！真選組のサド王子ッ！なにしに來たヨッ！用はなにアルかッ！」

神樂は振袖姿にあわせて、髪型も変えていた。赤みを帯びた長めの髪は、頭の後ろでひとつにまとめられ振袖にあわせた鉄紺色の別珍のリボンが結ばれていた。いつも巻き込んでいる髪はゆるやかに巻かれ、神樂の白い顔のまわりでたおやかに揺れている。

青い瞳が振袖の深い色を反射し、いつもより暗めに潤んでいるようにも見えた。言葉づかいはいつもとまったくかわりはなく…いや、突然の総悟の出現にむしろきつい物言いになっている。けれど、その乱暴な物言いは、むしろ振袖姿の美しさを余計際立らせて見えた。

「…用は…あんたにもあるかも…」

「わたしの方はなんにもないッ！言いたいことがあるなら、さっさと見えヨッ！」

総悟は、磁石かなにかに引き寄せられるように、瞳をじっと見つめながら神樂にゆっくり近づいていった。一步一步近づいていくたびに、神樂の体からやさしいいい香りがしているのに気づく。いつもは、はなっから戦闘モードなだけに、そんなことにも気づかなかった。

手をのばせば、殴れる距離にまで近づいても総悟は一言も発することはなく、ただ神樂の瞳をひたと見つめるだけ。そんな総悟の様子に、さすがの神樂も黙りこんでしまった。至近距離に近づいてきた総悟に向かって

「…おまえ、人の話を聞いているか？用はなにかと聞いている…」

用心のため、いつでも跳びかかれるような足場を確保しながら神樂はもう一度、総悟に問い質そうとした。その瞬間、神樂よりも早

く総悟が大きく一步踏み込んできたかと思うと、両腕で神楽を引き寄せ自分の腕の中に抱きこんだ。

「おッ：おまえッ！気は確かかッ！離せッ！離せヨッ！」

振袖やら帯のせいか、いつものような動きがとれない。神楽は必死でもがいた。そんな神楽の顔を見下ろしながら総悟が呟くように言う。

「：あんた、卑怯でィ：」

「なに？」

「：こんな格好で、あっしの気を乱しやがって：気は確かかって？確かじゃねェよ：」

こんな姿のあんたを見て、アタマん中があんたしか映さなくなっちゃまってんでィ。もう黙って見ているなんて無理でさァ：」

「おまえ、さつきから何を言って：んッ！」

抗う神楽を、自分の腕の中に匿うかのように、固く抱きしめ直すと総悟は素早く神楽にキスをした。

「：ふ：ぬおおおッ！やめろヨッ！」

総悟の唇から自分の唇を引き剥がすように顔をそむけ、思いつきり総悟を両腕で突く神楽。

畳の上にすどん、としりもちをつきながら総悟が唇をぬぐいながらニヤリと笑う。

「：思いつきり噛みやしたねィ」

「：あ、あたりまえヨッ！用はこれかッ！それなら帰れッ！」

「氣に入ったィ：いままで初めてのキスでこんな乱暴な受けをした女は、あんたが初めてでィ。調教のしがいがあるってェもんでさァ：。」

とは言っても、実のところあんたへのキスは本チャンのついででさァ」

唇から赤い血をたらしながら総悟が立ち上がる。

「まだなんかやるアルかッ！」

「いや：用があんのは、あんたじゃねエ：

おいッそのでかいの！万事屋の旦那がおまちかねだ、行くぞ、
ついてこいィ！」

意外や意外にも総悟がそう声をかけると、定春は「あおんッ！」
といい返事をして総悟の傍に跳び寄った。

「さ、定春ッ？」

「なアに、ちょこつと借りていくだけでさア。心配しっこなしでさ
ア」

そう言いながら、定春に近寄ろうとした神楽の顎をひよいッと引
き寄せ、今度は頬に軽くキスをする。

「おまッ、いいかげんにしろヨッ！いったいなんアルかッ！」

「まアとにかく、でか犬借りていきますんで、後はよろしく頼んま
さア」

定春の背に飛び乗り、そのまま塀を飛び越え姿を消す総悟。

総悟の血のキスマークを頬につけたまま、神楽は志村家の一室で
呆然としていた。

：あいつ、なんか道路に落ちてるもんでも拾い喰いでもしたアル
か：

突然やって来て、そしてわたしにあんなこととして：

総悟のからみつくような腕の力や、目の力の強さに、自分の中の
思わぬ何かが抵抗する力を止めてしまったことに気づき、ただただ
驚くしかない神楽。

そして総悟に連れて行かれてしまった定春。

「：あ、あねごおおお！定春があさわわれたアルうー！」

ようやく気を取り直した神楽が、母屋のお妙や九兵衛に声をかけ
た時刻が、八時十五分。

「なア、後ろのトランクン中でごんごんいってんの、なアに？」

「…ッセエな、いろんな道具だろウがよ」

「なんだかけっこうでけエ音してんじゃなアい？」

十四郎が運転する車で市ヶ谷方面もちろんバトカーに向かう銀時と十四郎。さつきから後方のトランクからガゴン！とかグガン！といった重量系の音が聞こえてきている。

「何があるからわかんねエからな、思いつくかぎりの道具を積んできたまでよ…」

くわえ煙草で十四郎が呟く。

「だいたいてめエが思いついたことだってエのに、手ぶらで来やがって…」

ナビシートでは、銀時が窓枠に肘をつきそのまま頬杖をした姿勢で乗っていた。十四郎の呟きに軽く苦笑しつつも何も言わない。

「そもそも、結婚式当日に思いつくかア？しかも、天下の真選組に頼むって、どういう神経してやがんだよッ…」

十四郎の呟きは、ぼやきにも似たものになってきた。

「ってか、それを手伝っちゃってる俺！俺が一番ヤバくねエか、オイツ？」

「俺ア、真選組の副長に手助けを頼んだつもりはねエよ？」

銀時がおもむろに口を開く。

「あいつの心をわかる俺以外の唯一の男に、手助けを頼んだつもりだよウ？」

「こらアまたずいぶん買われたもんだ…」

十四郎はかすかに笑うと、ナビのモニターをちらりと確認した。

「じきに着く。いいか？」

「…あいよ」

着いたところは市ヶ谷の高台にある屋敷街。

時刻は朝八時前。本来ならば、そろそろ通行する者も出てきてもいい頃だが、お取り潰しになった屋敷の周囲には近寄る者すらもない。屋敷内に無断進入をする身にとっては好都合というものだが、やはり人の目は気になる。十四郎は車輛を目立たぬところに停め、銀時と進入経路を探ることにした。

「：さすがに嚴重に囲っていやがる：」

お取り潰しになったことをより明確に象徴するかのように、門全体に十字の鉄楔をかけ、ご丁寧にも警備担当の侍を二名も就かせている。おそらく他の裏門、西門の方も同じような警備体制であることは予想がついた。

「：ばっかじゃねエのか、誰もいないッてエのに」

「ここは幕府が見張ってますよッつウ、デモンストレーションみてエなもんだろ：」

「結婚式だからなア、あんま暴力はふるいたくねエんだけどなア：」
「バカか、おめエは。時間がねエんだろッ？ さっさとぶっ倒して、金木犀を掘り出すぞ、こるア」

仕方ねエなア、としぶしぶ銀時が洞爺湖を構えようとした時、遠くからひゅるるるる：と砲丸のようなものが飛んでくる音が聞こえてきた。瞬間、十四郎と銀時の目の前を赤い火柱が通過し、正門を囲っている鉄楔を一瞬で総破壊し、門扉ごとふっとばした。もちろん警備の侍は銀時たちよりも早く火柱を目撃し、一目散に逃げしまっている。

「：おっかねエなア、おい、なんだア今のは！」

「まさかと思うが：まさかな：」

火柱が飛んできた方向に目をやると大きな白い犬と、バズーカを肩に乗せた総悟の姿が見えた。「：おまッ！ いまのおまえの仕業かッ！」

「さいでさア。ちょっとまどろっこしかったんで、手荒な挨拶になりやしたが、門を開けさせていたただきやしたイ」

「うまい具合に開いたツちゃ、開いてるよ、ほんと」

「会心の出来でさア」

「って、おいッ！門ぶっ壊しやがってエ！てめエ、どうすんだツこれ！」

「なアに、雷でも落ちたってことにすればいいんでさア」

「今日の雷は、街中を横っぱしりしやがンのかよッ…」

壊れてガタガタになった門をくぐりながら、ぶつぶつ言う十四郎が、次第に腹の底から笑いがこみあげてきたようだ。同じように銀時も、必死に笑いをこらえている。

「…っは！いったい何を遠慮してたんだかなア、俺としたことがア、ハハッ」

「ああ、まったく…。取り潰されてようが、なんだろうが、いつものように正々堂々とかつさらっていくまでだってエのによッ、ツハ！」

「ヘンな遠慮をしてたもんだな…プハア、なんか氣イ抜けたわ、俺」

こみあげてくる笑いを嚙殺しているため、小刻みに震えながら十四郎が銀時を振り返る。粉碎するつもりで一度ふりあげた洞爺湖を腰に戻しながら、門扉に近寄る銀時。バズーカで破壊された門扉のかけらがパラパラと降ってくるのをヒョイヒョイとよけながら、十四郎に声をかける。

「じゃ、行きますかア？」

スコップやブルーシートをこそっと持ち直す銀時。そのままスタスタと敷地内に入っていく

おうよ…返事をしながら同じような道具を抱えた十四郎が、銀時に続く。

「ってか、どっちイ？」

「…てンめエは、図面の見方もわっかんねエのかよ…ッ。こっちだ、ついてこいイ！」

苦虫をかみつぶしたような顔で十四郎が、顎をしゃくって方向を示す。この時点で、時刻は九時五分。

志村家では、早朝から上を下への大騒ぎが始まっていた。まだ東の空が暗い頃から、今日の式のための準備が始まっているのだ。昨夜からは、九兵衛も泊まりこんで、女手総出で花嫁衣裳の準備をしている。

なにしろ糖分には事欠かないが、金目のものには縁のない万事屋。その周囲も、ご同慶の至りといったものたちばかり。花婿は適当な衣装を見繕えばいいが、花嫁はそうはいかない。どうしたものかと思案にあぐねていたところ、結婚式の十日前ほどになってから突然、柳生家の敏木斎より申し出があった。九兵衛の母が嫁いできた時に着た衣装を使ったらどうか、と。

聞けばその衣装は、敏木斎の妻も自分の結婚式の時に着たものだと言う。

「孫が女子だったら、嫁にいく時に着せてやりたいと折につけてよく話していたものでな…」

九兵衛といっしょに志村家を訪れた敏木斎は、そう言って声もなく笑った。

「あいにく当家の孫は嫁に行かんようじゃて、着てもらう方が着物も嬉しかろうよ」

敏木斎の言葉に久兵衛もえくぼを浮かべる。

「お祖父様から、この話をいただいた時、僕もほんとうにいい考えだと思った。

ほんとはお妙ちゃんに着てもらってほしいキモチもあるけど、いいんだ。

新しい門出に母上の着物が役に立つならと思って。いや、ぜひ母上の花嫁衣裳を着て幸せになってほしいんだ」

お妙と並んで、九兵衛と敏木齋の話聞いていた彼女が畳に手をつき深く礼をし、何かを言おうとするがなかなか言葉にならない。嗚咽が背中を震わせている。その背をゆっくり撫でながら、お妙も何か言葉をかけようとするが、そんなお妙の目にも光るものが盛り上がってきている。

「もう！九ちゃんたら！…かつこよすぎるわよ！」

袂で目頭を拭いながら、お妙はわざと九兵衛を責めるような言葉を口にする。

「花嫁衣裳なんて、家にあった私の母のものはとくに質に出してしまっているし、お登勢さんもこればかりは右から左へ用意できるもんじゃないって頭を抱えていたから、ほんとどうしようかと思っていたのよ」

頭を下げたままの彼女が、お妙の言葉に続ける。

「真っ白い花嫁衣裳に身を包んで好きな方の許へ嫁ぐのは、こどもの頃から夢でした。でもこどもの頃と、今のわたしは違う。だから好きな方と結ばれるだけでも充分しあわせだって、そう思っておりましたのに…。それなのに…」

「箆笥の中にしまっておくだけなら、まさに箆笥のこやしじゃからの。あんたみたいなやさしい心持の娘さんに着てもらえば、婆さんもある世で大喜びしとるじゃろうて、な、九兵衛？」

「そうだよ？だからもう泣かないで？」

九兵衛が彼女の肩をやさしくつかんで体をおこす。手ににぎりしめた手拭で涙や鼻水を拭きながら彼女は泣き笑いの顔でお妙や、九兵衛、敏木齋の顔を見た。

「わたくし、ほんとうに敏木齋様の奥方様の花嫁衣裳をお借りしてもよろしいのでしょうか？」

「よろしいのでしょうか？じゃなくて、着てほしい、ってお願いしているんだけど？」

「そうよ。九ちゃんがここまで言ってくれてるんだから、変な遠慮はしないで、ここはじゃあ、着てあげてもよくってよ？？くらいの勢

いで借りちゃっていいのよ！」

お妙がやっぱり泣き笑いの顔で、彼女に笑いかける。

「そうしてきれいなきれいな花嫁さんになって、あの天パー変態男を吃驚させちゃえばいいのよ！」

「：はい！びっくりして天然パーマがストレートになっちゃうくらい、私、がんばりますね！」

彼女の返事を聞いて、敏木斎がふおふおと笑う。

「あやつのそんな姿、ぜひ見てみたいもんじゃの」

「あ、その花嫁支度、僕も手伝いたい！妙ちゃんがお支度するの、僕、絶対手伝いたい！」

「じゃ、九ちゃんも結婚式の前の晩からうちにお泊りしちやいなさいよ！神楽ちゃんや、猿飛さんも呼んじゃおっか？」

「わしもいつしよにお泊りしたいのう……」

そんないきさつがあつて、ゆうべからのお泊りとなっているのだ。

敏木斎が持ってきてくれた柳生家伝来の花嫁衣裳は確かに上質のもので、みごとな仕上りのものだった。が、しかし長いこと日に当てていなかったため、虫がついていたり糸が痛んでいる箇所も見つかり、急遽関係女子の間で「花嫁衣裳繕いチーム」が結成され前日まで修繕を手伝っている。夜の十時を過ぎた頃には、早仕舞いをしたかまっ娘クラブのマドモーゼル西郷ママやあずみたちも針箱持参で駆けつけてくれた。みんなで白い絹糸を通した針を手し、花嫁衣裳の刺繍のほつれや虫食いを繕いながら、話に花を咲かせた。

「でもなんだかやっぱりまだ信じられないわあ、銀ちゃんが結婚するなんてえ」

裾まわりの始末をしながら、あずみがため息まじりに言うのと、割烹着に身をつつんだあやめが相槌をうつ。

「わかるわ、そのキモチ。ほらあたしなんか、最初っから銀さん好きなメガネのドジっ娘キャラできたもんだから、銀さんが結婚しちゃったらどうなっちゃうんだろう？みたいな？」

「さっちゃん、あのあの、やっぱりまだ銀時さまのこと、す、好きなの？」

「いやあね、もう！バツカじゃないの、もう！

確かにちょっと喪失感はあるといえはあるけれど、もうそんなことはどうだっていいっていうか、いえむしろ、どうでもいいのよ。

だいたい銀さんのことまだ好きなら、こんなところに来るわけないじゃないの！

っていうか、あんたはわたしの友達でしょ？友達は男よりだいじなの！

だいじな友達が結婚するんだから、その準備を手伝うのは当たり前なの！

変な憶測はやめてくれない？ふん！」

あやめは照れたようにそっぽを向きながら、言い返す。

「：さっちゃん、ありがとね」

「ちょっとお礼はできてから言ってよね！今から湿っぽいのはやめてほしいもんだわ！」

「なんて言ってるさっちゃんが、ちょっと雨降りなんじゃなくってえ？」

あずみにからかわれながら、針の手を休めてはいないあやめ。お妙や、マドモーゼル西郷もそんな様子を笑いながら見ながらも、やはりその手は忙しそうに動いている。

「意外といたみが進んでいたから、修繕はぎりぎりまでかかったやうかもしれないわね：」

「ええ、でもなんとか仕上げないと：」

「大丈夫、まかせて」

鋏でほつれ糸をちょんちょんと切りながら、隣で半襟をつくろっている彼女にマドモーゼル西郷が声をかける。

「ああ、もう花嫁さんになる人はもう休んだほうがいいわよ。ここはあとはあたしたちがやっておくから、お風呂に入ってもう寝なさいな」

「：みなさまといっしょにずっとこうしていたい」

「なに言ってるの、だめよ、だめだめ！寝不足の花嫁なんてありえないわよ、ねえ？みんな？」

その場にいるお妙、あやめ、あずみやその友達が一斉に頷く。

「銀ちゃんの腰を抜かせちゃうくらいきれいな花嫁さんになるんでしょう？だったら睡眠不足はお肌の敵よ！」

針仕事はまったくできないため、お茶淹れ要員にまわっている九兵衛や神楽も一様に頷く。

「いいんだよウ、気にすることなんかないアル！パックして寝るといいんだよ！」

「僕たちもいるから：といってもあんまり役には立ってないけど、まあ大丈夫だから。お眠りよ？」

みな言葉の聞きながら、ゆっくり彼女は首をふる。

「：おねがい、せめて今夜だけはこうしてみなさまといっしょにいさせてください」

「ちよつとだめよ？ちゃんと寝ないと明日は長丁場なんだから、ね？」

お妙が促すように声をかけると、彼女がちよつと鼻をすすりながら言った。

「両親が亡くなってから、こんなふうに集まっている話すなんてこと、久しぶりなんです。昔の家みたいで、しあわせだったこともの頃みたいで、家族みたいで：嬉しくてしかたないんです。：だから、だからお願いです、今夜だけわがままを言わせてください。」

花嫁衣裳の修繕が終わるまで、みなさんといっしょにいさせてください：」

しばらくの沈黙の後、マドモーゼル西郷がため息まじりに言った。

「さしずめこの中では、あたしがお母さん、ってかんじかしらね：」針を針刺しに刺し戻しながら、彼女に向き直って話しかける。

「しょうがないわね、明日死ぬ程眠くても知らないわよ？」

彼女は大きく頷き、針を持ち直していそいそと半襟の修繕を再開

し始める。そして、マドモーゼル西郷は神楽に向かって買出しを言いつけた。

「あまいものと、それと眠気防止の苦いお茶、あとおしゃべりに欠かせないものを買ってきてちょうだい。お金はこれで…」

「心得ましたア！おいで、定春ッ！」

神楽が出かけ、九兵衛がお湯をわかしに立ち去った後、マドモーゼル西郷が笑いながら言った。

「…さあ、今夜は話し倒して、縫い倒すわよ！いいわね、みんな！」

結局、花嫁衣裳ができあがったのは午前四時すぎだった。出来上がりを確認し、あずみやマドモーゼル西郷はいちど帰ってから式場に向かう、と引き揚げた。神楽やあやめはいっしょに客間で高いびきだ。九兵衛も同様にふたりの傍らで静かな寝息をたてている。

「お茶がはいったわよ…」

形を整えて衣紋かけにかけられた花嫁衣裳を前に座り、見入っていた彼女に、お妙が声をかける。

「…はい、どうぞ」

「ありがと…」

お妙の差し出すお盆から、湯呑を手に取りお茶をすすする。

「…あ、桜湯？」

「だってもう今日だもの、結婚式」

「そうだった…あと七時間くらい後ですね」

「そうよ…」

「…一年前、こんな将来があるなんて想像もしていませんでした」

「そうよね…」

「…父が切腹し、母も後を追うように亡くなり、もうどうでもいいやって。」

ほんとにそう思っていました。どうにでもなれ、好きにしてくれって。天人だの幕府だの、もうどうだっていい、ほっといってくれ…って思っていました。

松平のおじさまに真選組に連れていかれ、その後またどこかに預けられるって聞いても、ふーんって自分のことじゃないみたいなキモチで聞いていました」

「……」

「でも万事屋で預かっていただいて、神楽ちゃんや、新八さまに出会い、そしてお妙ちゃんと仲良くなつて。あやめちゃんに九ちゃん、たくさん友達ができていって…私、自分の未来の道がどんどん見えてくるようなキモチになりました」

「……」

「何々家のだれだれじゃなく、すっぴんの私が、胸をはって、どんと地面に足をついているような自信も出てきて…」

「……」

「これって、はじめてお妙ちゃんと会ったときに、お妙ちゃんが言うてくれた言葉が、私の力になったと思ってるんです」

「…?」

「新八さまからお姉さんを紹介するって言われて、開店前のすまいるではじめて会ったときのこと覚えてますか？」

「そんなことあったかしらね？」

「お妙ちゃん、私の肩をぽんぽんって叩いてこう言っただんです。」

『お互い、親の後始末には苦労するわね!』って。そして『でも、やっぱりお互い自慢の親なのよね?』って。嬉しかった…両親のこゝと忘れない日はなかったけれど、心のなかのどこかで恨んでるようなところがあったから、そんなキモチも見透かされたみたいで、かえってすごくすっきりしたキモチになった。そしてお妙ちゃんのこととが大好きになったんです!」

「あたし、思ったとおりのことしか言っていないわよ?」

「でも、すごく嬉しかったんだもん…」

「変な子!」

お妙は彼女の隣に膝をつき、上半身ごと彼女をぎゅっとした。

「変な子だけど、大好き!」

お妙の体の陰で彼女も言う。

「：私もお妙ちゃんが好き！ときどき怖いですけど！ふふっ」
その答えを聞きながら、お妙は無言で彼女にもたれかかる。

「なんだかいろいろ心配だけど、なにがなんでも幸せになるのよ…？
何かあったら、遠慮なんかしないですぐ連絡するのよ？何もなくても、連絡していいから、ね？」

うん、うん、と頷く彼女。

「お嫁に行くっていったって、遠いところに住むわけじゃないのに、
なんか心配なのよね…」

「それは…相手が銀時さまだから？」

「そうかも…なんだか心配がつきないってかんじなのよ」

「ううーん、そんなことないよって否定できないかも…」

顔を見合わせて笑い出すお妙と彼女。湯呑をお盆に戻し、ふたり
はそのまま畳に倒れこむ。

「あのね…」

「なあに？」

「いろいろありがと…」

「…どういたしまして」

互いの手をのばして、そのまま握り合う。

「ねえ？」

「はい…？」

「ずっとこのままでもいいのにね…」

「うん、今、同じこと思ってた…」

「でも、もう今日のお昼頃には人妻よ？」

「…そっか。人妻かあ…」

「…それも銀さんのね」

「…うん」

「もう少し休んだら、衣装の身支度始めないとね…」

「今日、たぶん絶対眠いけど、がんばりますね？」

「うん、死ぬ気でがんばって！」

ふたりは手をにぎりあったまま、顔を見合わせそつと笑いあった。

それが今から三時間程前のことだ。

身支度を整え、十時すぎには神田明神に向かって花嫁を連れて出なくてはいけない。六時をまわった頃、あやめたちも目を覚まし、互いに手伝いながら準備を始めた。ひとりで着付けができない神楽と九兵衛に振袖を着付け、髪も整えた後、お妙とあやめは彼女の花嫁支度にとりかかった。花嫁の高島田に結うのはあずみのゲイ友の美容師がやって来て、結い上げてくれた。寝不足でちよつと目が赤い彼女をからかいながら手際よく髪を結い上げ、八時すぎ髪が仕上がりに、いよいよ花嫁衣裳を着付け始めた時、奥から神楽の悲鳴が響いた。

「…あ、あねごおおお！定春があさらわれたアルー！」

「トシイ、そろそろ準備しようかって、とつつあんが…」

勲が十四郎の部屋の襖を開けながら、声をかけるが、もちろん返事はない。もぬけのからの部屋で、勲は文机の上に置手紙を見つけた。

「ん？トシよ、どうした…ん？ん？緊急の所用につき、直接神田明神に行くことにしたので、後はよろしくウ？それと、式服もついでにいっしょに持って行ってだとオ？」

手紙を手に勲は天井をあおぐ。

「トシよオ、なんかヤバイことに鼻つつこんでるんじゃないな…もう、なにやってんだか！ってか、俺、パシリじゃん！」

ぼやく勲の声が屯所の中庭に響き、猫の椿がいぶかしげに勲を見上げて小さくないている。この時、時刻は九時半すぎ。

「…っへくしよイ、ちくしよめイ！」

十四郎が不意にくしゃみをする。

「なにになに？ 噂でもされちゃったア？」

「おきアがれ：大方、俺に惚れてる女たちが俺を取り合って喧嘩でもしているンだろうよ」

「それ妄想？ 痛すぎるわア、勘弁してくんなアい？」

屋敷見取図に従い、彼女の思い出の金木犀の木を探す銀時と十四郎。

「…来たか」

「ああ、そろそろ来る頃だ」

表門が破壊され、何者かが進入したことを知り奉行所の配下がやってくる頃だ。表門は、総悟がバズーカを携えて鉄壁の守りをみせているだろうが、西門と裏門からどんな連中が来るのか：

「まずは金木犀を確保してからだろ？」

「どんだけのかさなのかもわからねエしな：」

なるべく奉行所連中の目にふれぬよう、身を隠しながら屋敷の奥へと進む。いつでも抜けるよう互いの刀の柄に手をかけたままの姿勢で、たどりついたのは西洋風の小さな庭だった。

「…行き止まりだな」

「…ああ」

「たぶんこの庭の中にあるな、例の金木犀は：」

「…おう、早速探すとすらア」

そう言うなり、鼻をひくつかせながら片っ端から樹木の花の香りを確認し始めた銀時。

「…まさかと思うが、あんた、金木犀ってエのがどんな花かわかねエっていうんじゃねエだろうな：」

「いや、たぶん見たことはあんだらウが、まったくわかねエ。においしかわかねエ」

「…ッ！ あんたの無計画っぷりには慣れてきたつもりだが、やっぱりだめだ。耐えらんねエ…」

「いやしかし、どうなの、この庭？」

「なにがッ？」

「なんだか外国にいるみたいじゃなァい？」

「あのこのおやじさんってイギリスに留学していたことがあんだろ？だからつくったンじゃねエの？こんな庭を……」

「……へえ、初耳ですけど。そんな話、トッシーったらいつのまにそんな話、聞いちゃってるわけエ？」

「……た、たまたまだッ、たまたまッ！変な氣イ回してンじゃねエ。それより見つかったのか？」

「あ、これだと思う」

銀時が指差した樹木は思ったよりもでかかった。しかも枝っぷりもよく、片手でつかんで走れるような代物ではない。

「とにかく掘り出すっきゃねエ、さっさとやるぞ、こるあ！」

ざくざくざく、と無言でふたりはスコップをふるう。次第に額に汗がうかぶ。しかも無法侵入者の形跡をたどって奉行所の連中がどんどん近付いてきているようだ。

「よっしゃ、根廻は全部掘り出したぜイ」

「……ああ。あとは運ぶだけだな……ッても、パトカーにも乗らないよ、これ。」

やっぱ定春呼んでおいて大正解だったわ、ほんと」

「よし、じゃあでか犬を呼べ！」

人差し指と中指を唇にあてて指笛を吹く銀時。ほどなくしてドーーーーーン、ドーーーーーンと鈍い重低音が二度ばかり聞こえてきたかと思うと、総悟を背に乗せた定春がふたりのもとに駆けつけてきた。

「念のために聞いておくが、さっきの二発の砲弾音、あれおまえの仕業？」

「他に誰がいるんでさァ。おかげでややこしい連中、全部蹴散らすことができたぜイ」

「そらどーも……」

銀時は頭をかきながら、定春に掘り出した金木犀を示す。

「これを今日、神田明神まで持ってってほしいんだけどオ、どオ？やれますか？」

ふんふんとブルーシートに包まれた根元の部分のにおいを嗅ぎ、そして花の香りをふかふか嗅いだ定春。銀時に向かって「ンあんッ！」と一声ないてやる気を示す。

「ようし、定春、じゃアちゃっちゃんと神田明神まで行くとするかア……」

定春の背中に金木犀のかたまりを固定し落ちないようにする。そして「早く、てめエらも乗りな」と十四郎と総悟のふたりを振り返る。が、ふたりは動こうとしない。

「なんだよ、どうしたんだよウ？早く乗れって！」

「いや、俺らは後から行くわ」

「俺も、そうさせてもらいやす」

「……はア？つべこべ言ってる時間はないんだからア、早くしろッて！」

十四郎がにやにやしなから、総悟に向かって言う。

「ついてってもなア、ねエ沖田くん？」

「なんですかい、土方さん？」

「どうせふたりつきりで話してエんだろ？なア万事屋の」

「そうでさア、どうせいちゃこらしながら話すってもんでさア」

「なにそれ？俺がいつそんなこと言いましたア？やめてくれないイ？そういうこと言うのやめてくれないイ？」

銀時の顔が赤くなっている。

「それに、俺らはここの後始末をしなきゃならねエしな……」

「旦那は今日の主役だ、早く神田明神に行きなせイ！」

ふたりの言葉を聞きながら、赤い顔のまま定春に乗る銀時。

「すまねエな……じゃ遠慮なく向かわせてもらわア」

泥だらけの着物を翻して、銀時は慌ただしく去って行く。この時

の時刻、十時十五分。

「門扉その他の修繕費、万事屋に請求しときやすかイ？」

「おめエ、それやっちゃ可哀そすぎやしねエか？」

「：なアに、これっくらいいたいたもんじゃないやねエ。しあわせボケしたやつにはいいご祝儀になりますア：」

そんなことを言い合いながら、掘り出すのに使ったスコップや道具を隅に寄せて、自分たちの埃や泥汚れを払うふたり。

「どうせ、もう少ししたら目付連中がやって来んだろ？」

「ヘエ、壊れた門とかなんて説明しやすかイ？」

「：壊れたじゃねエよ、壊した門の間違いだろウ？」

「ちっせエことにこだわるから、結局告れずじまいになんじゃねイですかイ？」

「あ？なんか言ったか？とにかく、今回の所業はすべて霊による仕業つつウことでよろしくウ」

「やれやれ、困った時は全部悪霊の所為ですかイ：」

「いいの！これっくらい適当にしといた方が、後々いろんなこのおさまりがいいから、いいのッ！」

総悟に噛み付くように言葉を投げかけ、おもむろに煙草を取り出す。火をつけようとして、総悟の口許に血が飛び散っていることに気づく。

「おい、その血イどうしたイ？」

「：ああ、これですかイ：なにちよつと気の荒い山猫に噛み切られたんでさア」

「：はッ、いったいどこの玄人女としけこみやがったんだか：ご苦労なこった」

「：ふん：お楽しみはこれからでさア：」

目付から派遣されてきた侍たちが到着したらしい。表門の方からざわざわとしたざわめきが伝わってくる。

「：そんじゃま、いっちょ説明しに行っただろかア」

「ヘエイ…」

十四郎と総悟のふたりが駆けつけた侍たちに、嘘八百の悪霊話をでっちあげ始めた時刻、十時半すぎ。

定春がさらわれたと訴える神楽の話をよくよく聞いてみれば、真選組の総悟がやってきて銀時が呼んでいるから、と連れていったと言う。

「よくわかんないけど、そう言うんじゃないの？」
「まあ、銀ちゃんが必要って言うならねえ…？」

白無垢の着物を着付け、お妙と協力しながら帯を結びあげているあやめが、ふともらす。

「でも、結婚式当日に定春が必要なことってなんなのかしら、気になるわ…」

「まあ、いいさ。きっと今にわかると思うし。ね、妙ちゃん？」

「そうよ、そんな天パー変態男のことより、今は花嫁支度を完璧に仕上げるのが重要なのよッ！」

帯が高く結ばれ、ゆうべほぼ徹夜で修繕した内掛けを彼女の肩から羽織らせる。そして高島田に結った頭にふんわりと綿帽子をかぶせる。そして胸元に懐剣を差込み、手には扇を持たせ、お妙が満足げにうなずいた。

「…できたわよ」

固唾をのんで仕上がるのを待っていたあやめ、九兵衛、神楽が歓声をあげて彼女の顔を覗き込む。

長いまつげを少し伏し目がちにし、目にはいっぱい涙をためてこちらを見る瞳が見えた。

「おおおお！美しいアル！これは銀ちゃん、腰ぬかすアル！」

「神楽ちゃんもすごくきれい。似合ってる」

「あごみの友達に借りたアル…ほんとに似合ってるアルか？」

「うん！たぶん神楽ちゃんを見ても、銀時さま、きっと腰ぬかすと

思います！」

「ああ、こらこらだめよく、涙なんかこぼしちゃお化粧が崩れちゃうじゃないの！」

お妙が、甲斐甲斐しく母親のように世話をやく。

「すごくきれいだ。なんだか僕までどきどきしてくる……」

九兵衛が彼女の手をそっと握りながら囁く。

「銀時に見せつけてやるがいい……少々もったいない気もするけどね」
あやめはといえば、さんざん強気なことを言っていたにもかかわらず、もう泣いていた。

「……、うう、やだもう！あたしったらバカみたいじゃない！」

ティッシュをばさばさ取りながら、涙をぬぐったり涙をかんだり忙しそうだ。

「気の利いたことを言おうと思ってたのに、ごめん……」

膝まづいて、綿帽子の中の顔を見上げながらあやめは涙声で祝福する。

「……しあわせにならなかったら、承知しないからね！」

「うん、あやめちゃん、わかった。約束します」

なんとなくしんみりしながら、それでいて心の中がほっこりしているようなそんな感じになっていたところに、突然お登勢が息せきって走りこんできた。

「銀時はいるかいッ！」

え？とその場にいたものすべてが、お登勢をいぶかしげに見つめる。

「朝、突然『結婚式だから、ちゃんと約束守んなきゃいけねエ』って言って出てったつきり、帰ってきやしないんだよ！てつきりこっちに来てんのかと思って来てみたんだけど……。いったいどこに行っちゃったんだろうね……。ほんとにもう、てめエの結婚式だってエのに、ちったア落ち着けてもんだよ」

いつでも式に出掛けられるように留袖に着替えているものの、心配のあまり自分自身が、落ち着かない様子のお登勢だ。お登勢の言

葉に不安げに顔を見合すお妙と、あやめ。神楽や九兵衛も困惑している様子だ。さっきまでの晴れやかな雰囲気危うく落ち着かない不安な様子になりかけた時、彼女がにっこり笑って立ち上がった。

「じゃあ、私、先に神田明神に行って銀時さまが来るのを待ちます」

「だって、段取りじゃア銀時に迎えてもらって、揃って明神様のところに行くってなってンじゃアないのかい？」

お登勢が彼女に思案気に尋ねる。

「そうよ、銀さんが出迎えて緋毛氈の上をいっしょに歩いていくって言ったのに……」

お妙やあやめが心配のあまり口々に騒ぎ出す。警察に連絡してみるか？との提案も出た。困った風情で立ったままの彼女の手を、神楽がそつと握りニツと笑ってみなに向かってこう言った。

「みんな忘れたアルか？糖分取りすぎの天パー変態おやじだけど、万事屋銀ちゃんは守れない約束を一度だってしたことないアル！侍は守れない約束はしないアル！」

「……そうだった。まあ、それにこんなことはむしろ想定内なんじゃないか？妙ちゃん」

九兵衛がお妙に向かって言う。その言葉に苦笑しながら、お妙が頷く。

「言われてみればそうね。銀さんなら、結婚式ぎりぎりまでなにかしそūdものね。心配するだけ損しちゃうわね」

神楽と手をつないだまま、彼女が元気よく言った。

「ではみなさま！お支度もできたところで神田明神にいざ行かん！」

おお！振袖や留袖の正装に身を包んだ女衆が拳をふりあげて、一斉に声をあげ、そして笑い崩れる。

「なんだい、これじゃあ四十七士の討ち入りも同然じゃないか！もつとしめやかにするもんじゃないのかい？」

お登勢が笑いながら、彼女の空いているもうひとつの手を握り、甲をぼんぼんとやさしく叩く。

「ものすごく綺麗だよ。さあ、胸をはってしゃんとして乗り込むと
しょうか？」

お登勢の言葉に、大きく頷き、そして神樂を見やりもういちど頷く彼女。

ちようど玄関から「ごめんくだせエやし！」という声が聞こえてきた。九兵衛がすぐ玄関にまわり対応しているようだ。短いやりとりを交わした後、じきに九兵衛が小走りで戻ってきた。

「車屋さんが来た！さあ、みんな乗って乗って！」

さらに部屋中に活気が満ち溢れた。花嫁を支えるようにみなが寄り添い、玄関に向かう。門先には二人乗人力車が何台も待機していた。志村家から神田明神までの道のりを歩いて移動はないだろう、と今日この日のために松平片栗虎が用意してくれたものだ。みな、晴れがましい面持ちで次々と乗り込む。

「準備はよろしいですかイ？」

「ええ、よろしくお願いいたします」

花嫁姿の彼女の隣に座ったお妙の言葉を合図に、一斉に車が動き出す。

「今日はみごとな江戸晴れですね…」

綿帽子を少しかざすように車から空を見上げる彼女。晴れ渡った空の青さが眩しい。

「さ、いっちょ走らせていただきやす！」

各人力車から男衆の頼もしい掛け声があがる。この時、十時を少々まわったところ。結婚式まであと一時間を切った。

四ツ谷から市ヶ谷に抜け、外堀通りからそのまま御茶ノ水に向かう道を走っている銀時と定春。車をよけながら車道を走るので、右に左にと大きく揺れ、背中に乗っている銀時も苦労しているようだ。必死に金木屋の株がずり落ちていかないように支えている。

「…よオし、あともう少しだ。定春ウ、無事役目を果たしたら、生

肉のご褒美出してやつからア！」

ご褒美の言葉を聞き、定春の走る足にぐんと力がこもる。

「おお？なんだよ、おまえ、やればできるじゃないのオ？ってか最初っからこのっ位のスピードで走れッつの！」

御茶ノ水の坂をのぼりきり橋を越え、神田明神の参道が見えてきた。

「そらア定春ウ！ラストオスパアアアトオオオオ！行けエ！」

「ああおおおんっ！」

最後の急な短い坂を駆け上り、鳥居を一気にくぐりぬけ境内になだれこんだ。砂利から砂埃を舞い上げながら、定春が停止し銀時はほぼ振り落とされるような形で飛び下りる。

「イよっしゃアア！式前に間に合ったア！」

「ぼけえええ！間に合つたらんわあああつ！」

銀時のよこっつらを、お登勢が張り飛ばす。重心を崩して砂利の上に銀時が座り込む。

「ジャストナウ、十一時じゃ、ぼけえええっ！」

まじで？あれ、俺、むしろやや遅刻しちゃってるウ？自問自答しながらお登勢を見上げる銀時。お登勢のすぐ後ろに白い陰が見えた。いや、白い陰というより白づくめ…白装束のような姿の女が立っている。

「白装束、怖ッ！なにそれッ！」

「ばーか！よく目をこらしてごらんよ！」

汗と泥の顔を着物の袖でぬぐい、もういちどよくよく白装束の女を見てみれば、あのこがちょっと涙目で笑ってこちらを見ていた。

「銀時さま、お待ちしておりました…」

打ち掛け姿のまま、こちらに近寄ってくる。

「……………」

彼女の花嫁衣裳姿を声もなく見つめる銀時。

「銀時さま…？」

花嫁をじっと見つめながら、ゆっくり立ち上がる銀時。

「神主さんよ、もうちょつとだけ時間もらえねエかな？」

水色の水干をまとった宮司はしばしの思案後、了承した。

「わかりました。花婿の着替えもあるかと思imasuので、お式は十五分後から始めることといたしましょう」

すぐさま、着替えろッ！とせかしてくるお登勢や、彼女といつしよに控え室に向かおうとした参列者に向かって銀時が声をかける。

「悪い、みんなちょつと待ってくれ。申し訳ねエんだが、ちょつとの間だけこいつとふたりつきりにしてもらいてエンだけど？」

女衆のみならず、すべての参列者からのひやかす声を背に受けながら、銀時は花婿専用の部屋に彼女をいざなった。先に彼女を奥に通し、自分は後手で扉を閉め、それに寄りかかりながら銀時が静かに言った。

「そのまま、こつちを振り返ってくれよ」

不思議そうな顔をしながら彼女が銀時を見返す。

「こうですか…？」

「…うん」

「…銀時さま？」

「…めっちゃくちゃ綺麗だ。いますぐぎゅつとしてエ…」

銀時の顔が照れくささで少し赤くなっている。

「…ほんとは、俺以外の誰にも見せたくないくれエ綺麗だ…。ずっとここでふたりつきりでいてエくれエだよ、ほんと」

「…銀時さま…」

そしてゆっくり彼女にちかづく綿帽子のすそをそつとめくりあげて、じつと彼女の顔を見つめ、銀時は遅れたことをまず謝った。

「今日は、どたばた取り込んじゃって…大事な日だってエのに遅れちまって、すまねエ…」

けどよ、どうしてもおめエに渡したいもんがあつてさア、それを取り行つてたら遅れちまった。ほんとだったら、ここに先に着いて、綺麗なおめエを出迎えなけりゃいけなかったのによ…すまなかつたア…」

「…ふふ。お登勢さまから出掛けたつきりどこに行ったかわからないことをお聞きした時『うっそ！まじでエ！』って内心吃驚しちゃいました」

「…でしょオ？ほんと、心配かけてすまねエ」

「…でも、大丈夫だって信じてました」

彼女が綿帽子の中から銀時を見上げ、嬉しそうに微笑む。

「銀時さまは守れない約束なんかない、って神楽ちゃんもみんなに言ってくれて。それを聞いて私、もうすっかり安心しちゃってました」

「…ありがとな」

「でもまさか定春に乗っていらっしやるとは！それにこんなに泥だらけになって！」

銀時の頬や服についている泥汚れに彼女が触れようとするのを、そつと止めさせ

「せっかくの花嫁衣裳が汚れちゃうよ？…でもぎゅっとしてエな、もう！ああだめだ、もう我慢できねエ！」

そう言うなり銀時は壁側に彼女を立たせ、自分は両腕をつき、腕の中に彼女をすっぽり包みこんだかと思うと、そのまま彼女の唇にチュッと音をたててやさしいキスを繰り返した。何度目かのキスの後、銀時は彼女を見ながらこう言った。

「…金木犀、取ってきたから」

そして、もう一度彼女にやさしくキスをするにニヤッと笑ってこう告げた。

「正真正銘、おめエの誕生日記念の思い出の金木犀、掘り出してきたから」

え？ガーデンの中にあつた金木犀ですか？と驚く彼女。

「そうそう、それ。ガーデンってエのか、あれ。こじんまりとした綺麗な庭だった。あれ、おやじさんの趣味なんだってなア？ま、そこからこう掘り出してエ？定春に乗っけて持ってきたわけエ」

「ほんとにほんとなのですか？銀時さま？」

「おうよ、万事屋銀ちゃん、きちつとお仕事させていただきやしたア」

「でも実家は今、封鎖されていて誰も入れないはず…あッ！」

銀時の泥だらけの着物や顔を見て、なにごとかを察した彼女。はつとして思わず口を押さえたものの、心配そうに銀時に尋ねた。

「あの、あの、やっぱり無許可で？」

「…はッ！ ああ大丈夫、大丈夫。ちゃアんと警察の方といっしょに、掘り出してきたから」

「でもやっぱり、なんとなく無許可的な？」

ニヤニヤしながら銀時が彼女のほっぺたをつつく。

「なにになにィ？ 気になる？ 気になる？」

「……金木犀、覚えていてくださったんですね」

「…ん、でも悪ィな、ほんとに思い出したのは今朝。ババアが言った言葉で思い出してよう、そんでえいやッってことで、真選組のおふたりにご協力していただいて、おめエの金木犀を取り返したってわけエ」

「も、もしかして真選組のおふたりって十四郎さまと沖田さまですか？」

「おう、そうだよウ？」

「私たちがいたところに、沖田さまが定春を取りにいらしたらしいのですが…神楽ちゃんと何かあったみたいで。そっか…そういうことだったのですね」

「そうそう、大方ちよつとパンチでもかわしたんじゃないのオ？ だって沖田くん、定春と現れた時、口から血ィ出してたしね」

「それで、おふたりはまだ？」

「後始末をしてくれるって。おめエは結婚式にまず行けって。ちょい遅れちまったけど、ふたりのおかげでなんとか間に合ったってわけエ」

銀時の頬に彼女が手をのぼし、背伸びをしながら銀時の唇にキスをした。

「銀時さま、嬉しい。金木犀が私の手に戻ってきてほんとに嬉しい。父と母が今、ここにいてくれるような気がします」

「だめだめ、汚れちまうからそんなに俺にくつついちゃだめだよ？」
口ではだめと言いながら嬉しそうな銀時。

「明日にでも、万事屋の敷地のどこかに植え直そうな？今日のところは、おやじさんとおふくろさんの名代ってことで式にも参列してもらってよ」

「…はいっ」

銀時にもっこりとしながら、もう一度だけついばむようなキスをする。

「これくらいにしとかねェと、そろそろ怒られっからねェ」

そう言った途端、お登勢の声が扉の外から聞こえてくる。

「準備はいいのかいッ？銀時ッ？」

「…な？」

肩をすくめる銀時と、そんな銀時を見上げて笑い出す彼女。

「さあ、神様の前でいっちゃけじめをつけるとしますかア」

彼女が控え室に戻っていった後、仙台縞の紋付袴に着替えた銀時。お登勢が鏡に写る銀時の姿を見ながら「馬子にも衣装だね」と言い放つ。

「ああ？なんか言ったか？ババア」

「似合ってる、って言ったのさ。さあ準備はできたね、行くよッ、銀時ッ」

「なんでババアがしきってんのオ？俺の結婚式なのにィ」

「そりゃ銀さんがあてにならないからじゃないですか」

銀時が散らかしたものを片付けながら、新八が言う。

「言うねェ、新八くゥん」

「そりゃそうですよ、自分の結婚式に泥だらけで遅れてくる人なんていませんから」

「いいやア、けっこういるもんだよオ？三人にひとりはいるんじや

なァい？」

「いや、いねェよ。ってか、早く行ってくださいよ、もう！」

お登勢に仕切られ、新八に怒られながら、それでも銀時はどこか嬉しげな様子で式場側から指定されていた場所に行く。

神田明神では簞簟などの雅楽の演奏を受けながら、緋毛氈の上を厳かに歩き本殿へと向かい結婚式を執り行うことになっている。

廊下を歩いていくと、ああや々と来た！遅いアル！いつまで待たせれば気が済むのよ！などのおなじみの声が聞こえてきた。係員に誘導されていく間、参列者の中に式服を着込んだ十四郎と総悟の顔を見つけた。

「…お、間に合ったんだァ？」

「おかげさまでな、ってかてめェ、遅れてんじゃねェよ」

「旦那のおかげで、ちょうどいい頃合でさァ」

じゃ、のちほど…と互いにニヤリとしながら挨拶を交わす。

…朝から晴れたし、約束も果たせたし。

あとはいちばん大事なことをきっちり済ますとしますかァ…

定位置について銀時を待っている彼女の右隣に、すっと立つ。そして誰にもわからないようにそっと彼女の右手の先を握った。銀時の手に気づき彼女もそっと握り返してくる。前を見たまま銀時が小さな声で言う。

「何度も言ってるかもしれねェが…」

「…はい？」

「必ず幸せにすっから」

「…はい」

「まずは今日のところ、よろしく頼みます」

「ふふ。…はい」

どこまでも青く晴れ上がった空の下、ふたりは誓いを結ぶ。

本殿に向かう最中から涙ぐんでいる松平公、くわえ煙草を注意され慌てている十四郎の姿も見える。神楽は頬にまだ血のあとがついているようだし、沖田はといえばポーカーフエイスを決め込んでいるようだ。けれど誰もが今日の日を心から喜んでいる。

空は秋晴れ、日本晴れ。

どこからかまた、金木犀の香りがしてきた…

おしまい★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2132m/>

金木犀の誓い～銀時、いよいよ結婚式～

2010年10月8日14時33分発行